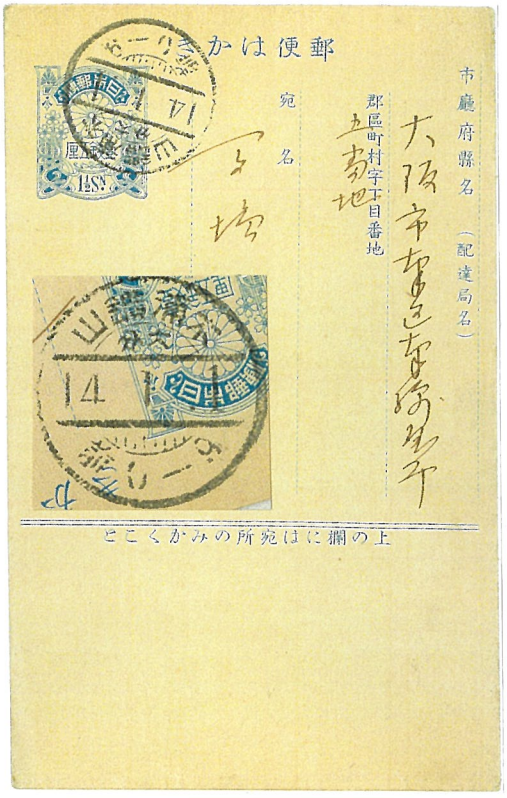

消印収集家の中には、鉱山や炭鉱の局を積極的に集めている方も少なくありません。たとえば、鳴美社の『たんぶるぽすと』45巻7月号（2021）などでは岡藤政人さんが鉱山局への思いを熱く語っておられます。

上の震災はがきは、大分の木浦（きうら）鉱山局から大正14年1月1日に差し出された年賀状です。木浦鉱山は大分県の南部にあって、鉛やすずを産出し、慶長年間(1600年前後)に採掘が始まったとされています。「～浦」という地名は沿岸部に多いのですが、ここは内陸部です。これには、昔、百済の王が戦乱に追われ九州に逃れた際、この山中ですずの鉱脈を発見、故郷の朝鮮半島西南部を偲んで「木浦(モクポ)」という地名をつけたのが、日本語読みで「きうら」になった由来であるという伝承が残っています。

（記：藤岡 靖朝〈日本郵楽会会員〉）